

主 題：主を畏れる生き方

聖書箇所：コリント人への手紙第二 5章9－10節

旅に出ると早く家に帰りたくなります。どこに行ってもやはり自分の家がいいなと思います。そのような経験は皆することです。パウロという一人の信仰者を見たとき、彼もそのように言います。家がいいと。もちろん、その家は地上にもっていた家ではなくて、もっとすばらしい住まい、天国を意味するのですが、そこに行きたいと彼は常に望んでいました。私たちも日々の様々な問題の中で、困難の中で、また、喜びの中で、もう早くこの地上の生活から解放されて、天に行きたいと願う人は多いのです。どちらかというと、それは早く問題から解放されたいと願って言うのですが、パウロは果たしてどうだったのでしょうか？確かにパウロが直面していた困難は、私たちが経験するものとは比べることのできないほどのものでした。パウロはいのちを狙われていたのです。ですから、パウロ自身そのことを指して、このように言うのです。Ⅱコリント1：8－9「兄弟たちよ。私たちがアジャで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。」と。パウロの会った苦しみは死をも覚悟するほどだったのです。私たちが想像するのは、そのような苦しみの中にいたのだから、パウロは早く天に行きたい、早く問題から解放されたいと願ったのだらうということです。果たして、パウロはそうだったのでしょうか？

また、パウロはそのような迫害を経験していただけではありません。彼はいろいろな所に出かけて福音を伝え、その結果いくつもの教会が誕生しましたが、その教会に対する重荷もあったのです。特に、私たちが今日学ぼうとしているコリント人への手紙、これは今のギリシャのコリントという町にある教会に宛てて記された手紙ですが、今もそこに行くとパウロの時代のコリントをかいま見ることができます。この町は罪に汚れ、腐敗していました。その中でクリスチャンが起こってきたのですが、彼らはなかなかそのかつての生活から訣別することができなかったのです。ですから、教会の中にはいろいろな問題がありました。たとえば、教会内に分裂分派があり、教会員が互いにねたま合っていた、教会内にいろいろな争いがあったり、考えられないような不道徳が横行していました。クリスチャンどうしが訴訟したり、間違った教えによって教会の皆が混乱したような状態にあったのです。そのことを聞いたパウロがどのようなであったか想像つきます。彼の心はほんとうに痛んだのです。あの人この人の顔が浮かんで、いろいろな心配があったことでしょう。ですから、パウロはクリスチャンでない人からはいのちを狙われるし、教会に関しては、いろいろなことで教会が混乱している様子を見聞きし、パウロの心は痛んでいたのです。私たちが経験したことのないような重荷でした。だからやはり、彼はそのような問題から解放されることを望んだのだと。果たしてそうでしょうか？

☆パウロが念願としていたこととは？

◎主に喜ばれること 9節

その答えがこの5：9に記されています。「そういうわけで、肉体の中にあろうと、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。」とパウロは言っています。「念願とする」とは、「熱望する」とか「ことを成功させようと努力する」という意味です。また、このことばには「それを名誉と考える」という意味があります。このような意味をもったことばをパウロはここで使っているのです。私が一番願っていること、それを成功させようと一生懸命努力していることは、実はこのことだと続くのです。それが「主に喜ばれること」なのです。「主に喜ばれる」という形容詞はいろいろなところで用いられています。たとえば、ローマ12：1－2、皆さんがよくご存じの箇所です。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。：2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」と。「受け入れられる」、「神に受け入れられ」、「ここにこのことばが使われているのです。ですから、喜ばれることというのは神に受け入れられることであると、パウロは教えるのです。もう一箇所、テトス2：9－10には「奴隷には、すべての点で自分の主人に従って、満足を与え、口答えせず、：10 盗みをせず、努めて真実を表わすように勧めなさい。それは、彼らがあらゆることで、私たちの救い主である神の教えを飾るようになるためです。」と、奴隷に対する教えとして記されているのですが、ここに「満足を与え」とあるこのことばが「主に喜ばれる」と同じことばです。パウロは主に喜ばれることを願った、それは神に受け入れられるようなこと、神に満足を与えるようなこと、そのように心がけていたのです。そのために彼は一生懸命努力をしていたこと

を私たちは見るのです。

さて、パウロはなぜ天に帰ることを望んでいたのでしょうか？そこに戻るわけですが、彼が決して今の苦しみから逃避したいためにそのように言ったのではないことは明らかです。彼が早く天に帰りたい、早く神のもとに戻りたいと望んだのは、そうすることによって本当に主を喜ばせることができるからだを知っていたからです。私たちもこの地上にあって、クリスチャンであれば主を喜ばせたいと願って生きています。そのために努力しています。みことばを学び、神の助けによってそのみことばを実践して行こうとします。それが神に喜ばれることだからです。しかし、そのように生きようとしてもなかなか難しいものです。言っていることと行なっていることが違うということは多々あります。しかし、この心の中には神に喜ばれることをしたいという願いが神によって与えられていますから、日々の生活の中で自分の罪を神の前に告白して行きます。しかし、次第に疲れてきます。どうしてこんなに悪い考えをもつのかとか、なぜ人に対してこのような思いを抱いてしまうのか、なぜ？…ということがいっぱいあります。そのような自分を見つめると、私たちが思うことはパウロが言ったように早く天に行きたいということです。それは苦しみからの解放ではありません。天に行ったらもう神を悲しませるようなことを、失望させるようなことを言ったり考えたりしたりしないからです。だから、パウロは早く行きたかったのです。早くこの罪のからだから解放されて、罪を犯すことのない、約束された栄光のからだをいただきたいと望んだのです。これがパウロの生き方だったのです。パウロはどんなときでも地上にあって、天に行っても私は神に喜ばれることをして行きたい、神に受け入れられることをして行きたい、神に満足を与えることをして行きたいと、それが彼の生きざまでした。このような生き方が「主を畏れる生き方」というのです。

5：11をご覧ください。「**こういうわけで、私たちは、主を恐れることを知っているの、**」と、残念ながら新改訳聖書ではこのように「恐ろしい」という字を使っていますが、これはパウロが言いたかったことを表わしてはいません。ここで使われていることばは、「畏敬」であるとか「畏怖」という「畏れる」という字を使わなければならなかったのです。

◎「主を畏れる」とは？

このギリシャ語は良い意味にも悪い意味にも用いられます。悪い意味では「臆病である」「卑怯である」ということですが、当然ここでは、「尊敬」「敬う」という畏怖の念として良い意味で使われています。辞書を見ると、その意味の中には「神からの仕返しを恐れるというのではなく、神を喜ばせないこと、神を不快にさせるようなことへの健全な心配、不安である」と訳されているのです。ですから、「神を畏れる」とは、自分がすること、考えること、想像することなど、私のすべてにおいて、どんな些細なことでも神を不快にさせることを私は決してしたくないとする、それがこの「畏れる」ということばの意味であり、主を畏れる生き方なのです。神はどんな小さな罪をも喜ばれません。だから、パウロは天に行けば、どんな小さな罪を犯すこともなくなるから早くそこへ行きたい、しかし、地上に置かれているのは地上でしなければいけないことがあるからだと言うのです。このような思いをもってパウロは生きていたのです。

今、私たちはパウロという一人の信仰者が、大変な苦しみの中にあっても主を畏れて生き続けて行こうとしている姿を見て来ました。そこで、このようなパウロの話を聞くと、私たちがすぐに思ってしまうことは「このように思えたのはパウロだから」だということです。彼のようにすばらしい信仰者だったからそのようにできたのだと。しかし、パウロ自身がそのことについて私たちに教えるのです。彼も私たちと同じように弱かった、私たちと同じように罪深かったのに、どうしてこのように主を畏れる生き方を継続して行くことができたのでしょうか？私たちもクリスチャンであれば、そのことを望んでいるはずです。だから、私たちはパウロがそのように生き続けて行ったその秘訣を知る必要があるのです。その一つを今日学びます。次回、私たちは二つ目の秘訣を見て行きます。

◎パウロが「主を畏れる生き方」をし続けたその秘訣とは？

それは10節にあります。「**なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。**」パウロを奮い立たせた出来事、パウロがますます神の前に正しく生きて行こうと奮い立った出来事、パウロが主を恐れ続けて行こうとしたそのような生き方を彼が歩み続けたその力の原動力とは、「**キリストのさばきの座**」の現実、真実性なのです。つまり、必ず私は「キリストのさばきの座」に立つのだというこの事実が、彼にそのような歩みの力を与え続けたのです。当時のコリントにあっても、法のさばきが行なわれる場所が存在していました。それは「ビーマ」と言われる地面よりも高くなったところでした。そこに裁判官が座って法のさばきをするのですが、同時に、そこではスポーツの優勝選手に賞が与えられるところ、冠が与えられるところでもあったのです。この手紙が送られたコリントの人々は「ビーマ」ということばを聞いた時にすぐ分かったのです。コリントの町にあった「ビーマ」という場所で行なわれたことを知っていた人々

は、このことばが使われたことによって、そこで何が行なわれるのか理解したのです。さばきが行なわれ、賞をいただくところであると。しかし、これはスポーツの賞ではなくて、クリスチャンがどのように生きたかに対しての賞をいただくところだとパウロは言うのです。ですから、この対象は10節に「**私たちはみな**」とあるようにすべてのクリスチャンが対象です。

そこで何が行なわれるのでしょうか？「**報いを受けることになる**」とあります。これは罪のさばきを受けるところではありません。罪のさばきを受けるところは別の場所です。私たちイエス・キリストを信じた人々はもう罪が赦されたのです。だから、私たちは罪のさばきを受けることが決してないのです。それはもう解決済みなのです。罪のさばきを受けなければならない人々は、罪が赦されていない人々であると聖書は教えます。それは「大きな白い御座のさばき」と言います。黙示録に記されています。人間は皆よみがえって、自分の犯したその罪を神の前で審判を受ける日がやってくると言います。この「大きな白い御座のさばき」とは、せっかく神が救いを備えてくださり、せっかく神が働いて救いへ導こうとしているのに、それを拒んだ人々が立たなければならないさばきの場です。クリスチャンはそこには関係ありません。もう罪が赦されているからです。しかし、クリスチャンは「キリストのさばきの座」に立ちます。これはクリスチャンだけのものであって、神を知らない人々が立つ場所ではありません。このように二つのさばきの場が存在しているのです。ここでパウロが言うのは、クリスチャンが立つさばきの座、「キリストのさばきの座」のことです。ここで行なわれることは「**各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受ける**」とある通り、イエスを信じてからイエスに会うまでの間、この地上でクリスチャンとして行なったことに対して報いをいただくその時であると言うのです。イエスを信じ救われた者はこの地上にあって大きな責任を負っていることを私たちは知っています。Iコリント6：20で教えるように「**あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。**」ということです。イエスを信じていない人にも大きな責任があります。この地球に住むすべての人々は皆、神によって造られたのですから、一人一人の責任はこの神を信じ、この神を愛して、この神に従って行くことです。唯一まことの神を信じて従って行くことです。その責任が皆にあるのです。それゆえに、その神を信じ受け入れていなければ、備えられた罪の赦しを受け入れないで逃してしまうなら、その人たちに罪のさばきが約束されていることは、この聖書が私たちに明確に教えているのです。では、クリスチャンはイエスを信じ罪の赦しをいただきましたが、その次は、本来私たちが造られた目的である「神のために行き続けてゆく」という責任をしっかりと覚えて今日生きて行くことが必要なのです。

もう一度9節に戻って、パウロが「**私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。**」と言いましたが、私たちは自分の判断で「主に喜ばれること」を決めていないのでしょうか？私たちが考えるべきことは、私たちが為す行為を見て人々がどう思うかより、神がどう思われるか、神が喜ばれるかどうかです。パウロは神が喜ばれることをして行きたいと考えました。その基準となるのは聖書です。みことばによって私たちは神が何を望んでおられるのかを見ることができ、神のみこころを知るのです。それを私たちは行なって行くのです。そして、10節に「**各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになる**」とありました。クリスチャンとして生きて来たこと、何をして来たのか、それに応じて報いを受けるのです。ここに「**善であれ悪であれ**」とあります。これを見ると、やはりクリスチャンは罪がさばかれるのだと思うかもしれません。「悪」は罪であるから、クリスチャンになってから犯した罪がここでもう一度さばかれるのだと。しかし、そのようなことを言うてはいません。

「善」とは永遠に価値あること、「悪」は永遠に価値のないもの、無価値なものです。なぜそう言えるのでしょうか？同じIコリント3：12－15を見てください。「**もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、：13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。：14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。：15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。**」。土台を敷いて家を建てる話しです。土台とはイエス・キリストだと言います。つまり、ここで言うのはクリスチャンのこと、クリスチャンの信仰生活のことです。イエスを信じた者は皆、イエスに土台を敷いたのです。その上に建物を建てて行きます。クリスチャンとしてのいろいろな働きです。「**金、銀、宝石、木、草、わら**」は二つに分けられます。価値のあるものと価値のないものとに。ある人は価値のあるもので建物を建てて行くが、ある人は価値のないもので建てて行くというのです。パウロが言わんとしていることは、救われてから私たちがどのように生きるかということです。イエスを信じて救われた人がそれから後の人生をどのように生きて行くのか、何を目的に生きて行くのかです。私たちは皆働き人です。その証拠に、神は救われた私たち一人一人に特別な霊的賜物を与えてくださったのです。そして、私たちを教会の中に置いてくださったのです。それは、私たちがそこで与えられた霊的賜物を用いて働くことによって、教会全体が成長するた

めなのです。それなら、「私は何もしなくて良い」とか「働きはだれかに任せておけば良い」というのは神の前に間違っていることは明らかです。なぜなら、今日という日を神が与えてくださったのは、私たちがこの日を用いて神のすばらしさを人々に証して行くことためだからです。ここにほんとうに神がおられること、ここに本当の救いがある、赦しがある、私たちはこの方によって造られ、神は私たちにすばらしい目的をもっておられる、これまで私たちには全然分からなかったことを神は教えてくださっていると、私たちはそれぞれに与えられた賜物を用いて互いに仕え合って行くことが必要なのです。働き人として働いて行くことが必要なのです。あるクリスチャンは救われたことに満足してそれで終わっているかもしれませんが、それは間違っています。これから私たちが学んで行くことは私たちがよく考えなければならないことです。いろいろな働きをすることができますが、この「キリストのさばきの座」に立ったときはじめて、私たちが行なってきたことの真価が問われるのです。正しい思いをもって働きをして来た人は、まさにここにある通り「**金、銀、宝石**」で自分の家を建てた人です。しかし、そうでない人もいます。もし、救われただけで何もしていなければ、神が望んでおられる働きをしていないことになるのです。一生懸命働いても、間違った動機でしているならそれもまた空しいことです。というのは、私たちがキリストの前に立ったとき、神が私たちをご覧になって何に目を留められるのかというと、私たちがどんな働きをしてきたかではなく、その働きをどんな動機をもってしてきたかです。神の関心はそこです。私たちがどのような目的でして来たか、だれのために？自分が人から誉められたい、人から良く見られたいという目的なら、すべて空しいことです。無価値なものです。だから、私たちはやって来た働きの一つ一つを見て、それをどのような動機をもって、どのような目的でして来たのかを思い出すのです。

そして、もう一つ、動機だけでなく目的だけでなく力です。だれの力でそれをして来たかです。よく私たちが聞くこと、また、言うことは「自分にできることをやります」です。もし、できることだけをしますと言うのなら問題です。なぜなら、自分の力でやるからです。そうすると、栄光を受けるのはだれでしょう？自分です。私はこれだけのことをしました、と。しかし、神が召してくださることを神の助けでしたときには、それをさせてくださった神が栄光を受けるのです。だから、私たちクリスチャンが覚えるべきことは、神から私たちにいろいろな働きの責任が託されるが、それがどのようなものであっても、神よ、あなたの助けが必要だと、神の前に謙虚になってその力をいただきながら働きを為して行かなければいけないということです。そうでなければ、本来栄光を受けるにふさわしい唯一の神が栄光を受けず、ふさわしくない私たちがその栄光を横取りしてしまうことになるのです。振り返ってみてください。私が今までにしてきたいろいろな奉仕や働きは、どのような動機でしてきたかを。ほんとうに神を愛するゆえに喜んでして来たのか、それとも、強いられて仕方なくしたのか、人の目を気にして人の評価を当てにして、自分の力を過信してやって来たのかと。そのようなものが「**木、草、わら**」なのです。しかし、正しい動機で正しい目的をもって神の助けを得て、一生懸命神のためにやって行くなれば、その一つ一つの働きはまさに「**金、銀、宝石**」で建てて行くことになるのです。そのことをパウロは言ったのです。

Ⅱコリント5章に戻って、10節に「**キリストのさばきの座に現われて**」とありますが、この「**現われて**」ということば、これを見るとキリストのさばきの場に立つということを考えてしまいがちですが、このことばには、そこに立つだけでなく「そこにあって目に見えるようにする」とか「明白にする」と、特にここは受身で使われているので、「明らかにされる、明白にされる」という意味です。だれによって？神によって、何が？私たちの本質が明らかにされるのです。私たちがほんとうはどのような存在なのか明らかにされるのです。神を騙すことなどできません。Ⅰサムエル16：7で神は人が見るようには見られないと、このように言っています。「**しかし主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」**」と、あなたがどのような心をもって信仰生活を歩んで来たのか、どのような心で働きをして来たのか、ほんとうのあなたがそこで明らかにされるのです。これがこの「キリストのさばきの座」で明らかにされることです。神はすべてご存じです。私たちのほんとうの姿を。だから私たちは、心を見ておられる神の前に、今日正しく歩んで行くことが必要なのです。そして、正しく歩んで行くために必要な恵みを神は与え続けてくださるのです。

私たちが神の前に立つときに、私たちの秘密、様々な罪、偽善的な生き方、批判的な歩み、そのようなものがすべて明らかにされます。ほんとうの姿が明確に示されるとき、それがこの「キリストのさばきの座」です。クリスチャンとしての人生がそこで計られるのです。ある人は永遠に価値ある生活をしたゆえに神から大きな祝福をいただくが、ある人は永遠に価値ある生活をしなかったゆえに、つまり、悪を行なったゆえに、その祝福をいただくことがないというのです。パウロはこの日がやってくることを覚えて今日をしっかり生きたのです。だから、主を畏れる生き方を継続したのです。今、私たちに必

要なことは、もう一度、私たちはこの「キリストの座」に立つのだということを覚えることです。クリスチャンであれば例外はありません。皆そこに立ちます。そして、私たちの信仰生活に対する正しい評価が神から下されるのです。347年から407年まで生きた、クリソステモという一人のクリスチャンがいます。彼は今のトルコのイスタンブールで働いた一人の信仰者ですが、最も偉大な説教家と言われました。彼はこの当時、コンスタンチノーブルにあって、その町の罪惡と異端に満ちた州都を改革しようと試みたのです。ですから、彼は大きな迫害を受けました。彼はこのように言い残したのです。「私たちは今、キリストのさばきの座に立っていることを想像しようではないか、裁判官がすでにさばいを始めておられ、すべてのことが明らかにされている。私たちはただ立つのではなく、明らかにされる。あなたは恥ずかしくないか！あなたはこの事実に愕然としないか！」と。

それなら、私たちは今から何をするのか、今日からどのように生きて行くのか？それは明確です。主に喜ばれることを為して行くことです。いつキリストのさばきの座に立ってもいいように。今この世界情勢を見たとき、終わりの日が近いことが分かります。世の中は良くなって行きません。聖書が教えている通り、世は悪くなって行きます。神の審判の日がまさに近付いていることを知ります。ルカの福音書の中でイエスは群衆にこのように言われています。12：54－56「**群衆にもこう言われた。「あなたがたは、西に雲が起こるのを見るとすぐに、『にわか雨が来るぞ。』と言い、事実そのとおりになります。：55 また南風が吹きだすと、『暑い日になるぞ。』と言い、事実そのとおりになります。：56 偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。』**」と。

私たちはまさに、神のさばきが訪れようとしているその瞬間に生きていることを知ります。それなら、私たちクリスチャンは、その生き方をもう一度吟味して正しい歩みをなして行く必要があるのではないのでしょうか？ジョン・バニヤンという信仰者はこのように言います。「さばきの日には、人は自分の身によってさばかれる。そのとき問われるのは、あなたは信じましたか？ではなく、あなたはみことばを実践しましたか？それとも、ただ口だけの人でしたか？である」と。その時が来ます。私たちのクリスチャンとしての歩みの真価が、神によって問われるとき、正しい評価が下る日がやって来るのです。その日に備えることができるのは今だけです。クリスチャンである皆さん、今日そのように生きて行きましょう。神が明日を与えてくださるなら、明日もまたそのように生きましょう。もし、この神のすばらしさをご存じない方がおられるなら、あなたを造り、あなたを愛している神がおられ、その方があなたに罪の赦しを与えようとしてくださっています。どうぞ、主に対して心を開きこの方を受け入れてください。すばらしい救いを受け入れて神の幸いをあなたのものにしていただきたいと思います。